

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 8 日現在

機関番号：24701

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2012～2014

課題番号：24659962

研究課題名(和文) ロールモデルの実証的調査に基づく看護教育プログラムの開発

研究課題名(英文) Development of the nursing education program based on the empirical research of role models

研究代表者

水田 真由美 (MIZUTA, MAYUMI)

和歌山県立医科大学・保健看護学部・准教授

研究者番号：00300377

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文)：我々はロールモデルの設定に及ぼす要因を検討した。その結果、看護学生が自己の行動に意識を向けることで現実の文脈に沿ったロールモデルを形成することが示唆された。そして、自己焦点化を支援することの重要性が明らかになった。次に、我々は実習経験が初心者の目標管理を促進するかを検討した。結果、実習経験により限定された行動や特性を達成するために多くの努力をするように調整することが明らかとなった。また、ロールモデルに関する基礎研究を実施し、批判的思考の影響を示す知見を得た。これらの知見を元に、批判的思考を取り入れた思考訓練を実施し、ロールモデルを適切に立てられるかを検討した。

研究成果の概要(英文)：We examined factors that affect setting of role models by nursing students. The results suggested that, by paying attention to their own behaviors, nursing students form roll models in context of the real settings. And also, importance of supporting students so to focus on themselves was revealed. Next, we examined whether experience of practical training of beginners promote objectives management. As a result, through experience of practical training, they have adjusted themselves to make more effort to achieve the limited behaviors and characteristics. We also conducted a basic research concerning role models, and obtained knowledge that indicates the influence of critical thinking. Based on the knowledge, we conducted a training program incorporating critical thinking, and examined whether students could set up role models appropriately.

研究分野：基礎看護学

キーワード：ロールモデル 看護教育

1. 研究開始当初の背景

新卒の看護職員の離職率の高さは問題視されている。日本看護協会(2005)の新卒看護職員の早期離職等実態調査では、新卒看護職員の職場定着を困難にしている要因として、「基礎教育終了時点の能力と看護現場で求める能力とのギャップ」が挙げられており、看護基礎教育の難しさを如実に表している。大学教育においてもこの問題は認められている。こうした問題点に対処するに当たっては、学習者が「その態度や行動に共感し、模倣、同一化、役割学習を試みようとする人物」と呼ばれる、ロールモデルを獲得することが重要であるとされている。例えば、松井ら(2001)は、看護学生に、看護師をロールモデルとすることで実習における自己効力感が高めていけると考え、多崎ら(2007)は、看護師が、熟練した看護師をロールモデルとすることで、看護師が成長していく上で具体的な目標設定の手段になりうると考察している。

ロールモデルは、情意的な効果や目標設定の指針になるというポジティブな側面をもつことが示されているものの、限界も示唆されている。例えば、Wiseman(1994)は、ロールモデルを模倣しても臨床能力が向上するとは限らないことを報告した。この点から、ロールモデルは、模倣のように学びの対象となるのではなく、自己の内面に取り入れて、自己の行動を振り返る際の比較対象あるいは基準として機能することによって効果をなしうると考えられる。

従来、ロールモデルについては、肯定的な側面が強調されてきているため、「どのように自分とロールモデルとの比較を行うべきか」という観点では検討はなされていない。本研究では、ロールモデルの適切・不適切な学習、適用の仕方について検討することを通して、どのようにロールモデルを活用すべきか検討し、適切な教育プログラムを開発することを目的とする。

2. 研究の目的

(1) 学生に職場での自己管理を看護師のロールモデルとして形成させるための支援を検討することを目的とし、自己の行動を意識すること(自己焦点化すること)の効果を明らかにする。

(2) 実習経験を通して、ロールモデルなどの目標を達成するために、学生の自己調整学習の能力がどのように変化するかを検討する。

(3) ロールモデルは、単なる模倣の対象ではなく、学習者の内面に取り入れて振り返りの基準となる。習慣的、批判的な振り返りがロールモデルの形成に重要である。そこで学習パターンを作成し、習慣的に看護師の行動を批判的に振り返ってもらい、どのようにロール

モデルが形成されるかを検討する。

3. 研究の方法

(1) 方法 1

対象:看護系大学に所属する大学2年生79名(平均19.8歳)と4年生87名(平均21.7歳)の合計166名。

方法:学年ごとに無作為に自己焦点化群と他者焦点化群とに分け、参加者は調査用紙に回答した。調査用紙は、1.過去の大学での生活態度について評価するための質問項目と、2.ロールモデルを選択するための質問項目である。1の過去の生活態度の評価の質問については、自己焦点化群の参加者の調査用紙には自分の生活態度について評価するように質問文が記載され、他者焦点化群の参加者の調査用紙には友人の生活態度について評価する質問文が記載された。すべての参加者は8個の質問項目について生活態度が当てはまるかどうかを5点評定で判断した。2のロールモデルの質問では、将来看護師になったときに目標とする看護師の行動特性を尋ねた。ここでは、10項目の行動記述文について、どの程度目標とする看護師が備えている行動特性に当てはまるかを5点評定で評価した。最後に10項目から最も重要だと考える行動特性を2項目選択し、選んだ理由の記述を求めた。

(2) 方法 2

対象:看護系大学に所属する大学2年生81名と3年生79名(3年生は事前調査実施時には3年生であり、事後調査実施時には4年生であった)。2年生の対象者については回答内容に欠落のない62名を分析対象とし(女性58名、男性4名)、3年生については同様に65名を分析対象とした(女性60名、男性5名)。有効回答率は、大学2年生は76.5%であり、3年生は、82.3%であった。分析対象とした参加者の平均年齢は2年生では19.6歳(標準偏差=0.7歳)、3年生は20.6歳(標準偏差=0.7歳)であった。参加者に社会人経験者はいなかった。

方法:2年生は基礎看護実習前後に調査を実施し、3年生は3年次の看護実習前に調査項目に回答し、およそ1年後の全ての実習終了後に、再度同じ調査項目に回答した。調査内容は、看護師にとって重要なスキル及び態度8つを示し、回答者が重要だと考える順番(ロールモデルに近づくための学習目標の優先順位)を尋ねた。続けて、これらを順序の高いものから、上位、中位、下位の3カテゴリに区分し、自分もつ努力を100として、これらを身につけるために注げる努力をそれらにどの割合で割り振るか(選んだ学習目標達成の努力の割り当て)の回答を求めた。

(3) 方法 3

対象:看護系大学に所属する大学4年生5名。

実施時期：平成 25 年 11 月

実施方法：プログラムは 3 日間批判的思考を用いて課題を実施する。課題は倫理的葛藤のある場面を提示し理想的な看護師としてどのように振る舞うか、看護師としてのロールモデルを考えて習慣的に批判的に考えるように教示し、思考をノートに記録した。

分析方法：ノートに記載された内容を「質問」と「発言」に区別し、「質問」を抽出した。質問の内容、質問の時期、質問の対象を分析し、ロールモデルの変化を考察した。質問の内容は「事実を確認する質問」と「思考を刺激する質問」に分類した。

倫理的配慮

研究への参加はすべて自由参加であり、研究への参加・不参加で不利益のないこと、調査結果についても研究以外の目的に使用しないこと、データの取り扱いについてプライバシーの保護に充分配慮することについて口頭と文書で説明を行う。学生には、強制力がかからないように、成績に影響しないことを説明した。

4. 研究成果

(1) ロールモデル選択への自己への焦点化の影響

重要なロールモデルとして選ばれた 2 項目を、自己焦点化群と他者焦点化群ごとに集計した。また、ロールモデルの項目のうち、「仕事と生活にメリハリをつけられる」「仕事以外の時間を有意義に過ごせる」の 2 項目を自己管理項目とし、それ以外の 8 項目と分けた。表 1 に各群の自己管理項目とその他の項目の項目数を示す。カイ二乗検定を行った結果有意差が認められた ($\chi^2(1) = 14.56, p < .01$)。加えて、自己焦点化群においては、自己管理とその他に違いが認められたが ($\chi^2(1) = 13.77, p < .01$)、他者焦点化群においてはこの違いは認められなかった ($\chi^2(1) = .79$)。

表 1 自己焦点化群と他者焦点化群において自己管理項目とその他の項目が重要なロールモデルとして選択された数

| | 自己管理 | その他 |
|--------|------------|--------------|
| 自己焦点化群 | 50 31.4 | 107 125.6 |
| 他者焦点化群 | 38 33.4 | 129 133.6 |

註)各参加者は 2 項目を選択した。したがって自己焦点化の総数は 164、他者焦点化の総数は 168 である。それぞれ欠損値が 7 と 1 であり、これらを引いた 157 と 167 が各群の総数となる。

看護師のように、緊張感やストレスの高い職場においては自己管理が重要であり、学生時から自己管理をロールモデルとして形成するように支援を提供することは看護系大学において重要である。本研究では、自己の行動に注意を向けることが、自己管理をロールモデルとして形成することに重要である

ことを示した。

ロールモデルを選択させる研究は数多くあるものの、自己への焦点化の効果を調べた研究はない。これは、ロールモデルの選択時には、自己に焦点化するのが自明だと捉えられてきたためと考えられる。本研究の結果は、自己焦点化がロールモデル選択において自明ではないことを示唆し、自己焦点化を支援することの重要性を明らかにした。

(2) 臨地実習の経験が看護系大学生の学習目標の内容と達成のための自己調整に及ぼす影響

学習目標の選択内容

2 年生は、実習前と実習後とで重要と認識される学習目標の内容が変化する傾向は認められなかった。最も重要な学習目標とされたのは実習前と実習後のどちらにおいても、「生活共同体における健康生活の看護アセスメントができる」であった。

3 年生は、重要であると認識された学習目標は、実習前と実習後とで明確な違いが認められた。実習前には、最も重要とされた学習目標は、「生活共同体における健康生活の看護アセスメントができる」であり、35 名が最も重要であるとした。実習後には、「人の尊厳の重視と人権の擁護を基本に据えた援助行動ができる」であり、40 名が最も重要とした。この結果は、学生が重要であるとする学習目標の内容が、実習の経験を経て大きく変わったことを示している。

学習目標の努力の割り当て

どのような学習目標に努力を割り当てるのかについて検討するため、学習目標の 3 つのカテゴリ（上位群、中位群、下位群）ごとに割り当てられた努力の割合（%）を算出した（表 2）。

表 2 大学 2 年生と 3 年生における、実習前と実習後の学習目標のカテゴリごとの努力の割り当て（%）

| | | 学習目標のカテゴリ | | |
|------|-----|----------------|---------------|---------------|
| | | 上位群 | 中位群 | 下位群 |
| 2 年生 | 実習前 | 44.7 (8.5) | 30.5 (4.8) | 24.8 (6.2) |
| | 実習後 | 45.5 (8.5) | 31.3 (6.9) | 23.2 (6.3) |
| | | 45.1 (7.8) | 30.9 (4.8) | 24.0 (5.3) |
| 3 年生 | 実習前 | 45.9 (8.2) | 31.4 (6.4) | 24.2 (7.1) |
| | 実習後 | 45.1 (11.2) | 32.7 (9.4) | 22.3 (6.9) |
| | | 44.5 (8.6) | 32.0 (6.3) | 23.3 (5.3) |

括弧内の数値は標準偏差

2 年生はカテゴリごとの割り当ては上位群が最も多く（45.1%）、続けて中位群（30.9%）、下位群（24.0%）であった ($\chi^2(2) = 6.94, p$

< .05)。同様に3年生も上位群が最も多く(44.5%)、続けて中位群(32.0%)、下位群(23.3%)であった($t(2) = 6.82, p < .05$)。

努力の割り当ての変化

それぞれの対象者について、学習目標の3つのカテゴリ(上位群, 中位群, 下位群)への努力の割り当ての標準偏差を算出し、実習前と実習後の値について比較した(図1)。

その結果、2年生は実習前と実習後とで標準偏差に有意な違いは認められなかった($t(61) = 1.63, p = .11$)。

3年生は実習前に比べて実習後の方が、標準偏差が大きかった($t(64) = 2.62, p = .01$)。このことは、実習経験を経て実習後の方がより特定のカテゴリに多くの努力を割り当てるようになったことを示しており、すなわち、特定のカテゴリへの努力を減らし、別のカテゴリに多くの努力を割り当てるようになったことを示している。

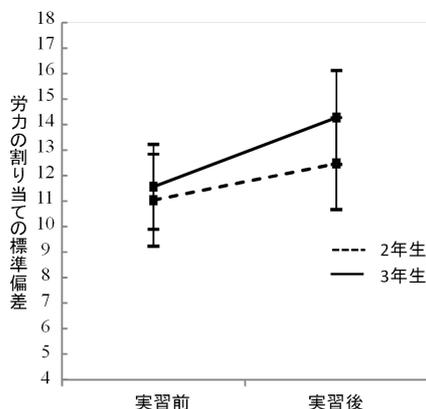


図1 2年生の基礎看護学実習と3年生の領域別看護実習における実習前と実習後の学習目標達成への努力の割り当ての傾向(エラーバーは95%信頼区間)

(3) 看護学生のロールモデル形成のための学習プログラムの検討

3日間批判的思考を用いて課題を実施し、思考を分析した結果、質問数は1日目が13個、2日目が9個、3日目が7個であった。3日間での質問内容は「事実を確認する質問」が8個「思考を刺激する質問」は21個であった(表3)。実施日ごとに質問の質の差は認めなかった。

表3 発話における質問の質の頻度分析

| それぞれの実施日における参加者の質問ごとの質問頻度 | | | | | | | |
|---------------------------|-----|---|-----|---|-----|---|---|
| 実施日 | 1日目 | | 2日目 | | 3日目 | | |
| | 1 | 2 | 1 | 2 | 1 | 2 | |
| 参加者 | A | 0 | 1 | 1 | 0 | 0 | 1 |
| | B | 1 | 5 | 0 | 2 | 0 | 2 |
| | C | 0 | 1 | 0 | 1 | 0 | 1 |
| | D | 1 | 1 | 0 | 3 | 1 | 1 |
| | E | 1 | 2 | 2 | 0 | 1 | 0 |
| 合計 | | 3 | 10 | 3 | 6 | 2 | 5 |

事実を確認する質問(質問コード1)に比べて、思考を刺激する質問(質問コード2)の方が多かった($X(1) = 8.30$)

また、各参加者の質問の内容が誰を対象にしたものを分析した結果、3名は看護師を対象にした質問が多く、1名は患者を対象、もう1名は対象が不明なものが多かった(表4)。「患者さんはどうだろうか?」といった対象による視点の切り替え時に事実確認の質問を認めた。

表4 各参加者の質問の内容分析

参加者ごとの質問の対象者の頻度

| 質問対象 | 医師 | 看護師 | 患者 | その他 | 最頻対象者 | |
|------|----|-----|----|-----|-------|-----|
| 参加者 | A | 1 | 2 | 0 | 0 | 看護師 |
| | B | 0 | 1 | 4 | 5 | その他 |
| | C | 0 | 2 | 1 | 0 | 看護師 |
| | D | 1 | 4 | 2 | 0 | 看護師 |
| | E | 2 | 0 | 4 | 0 | 患者 |
| 合計 | 4 | 9 | 11 | 5 | 0 | |

- A, C, Dは看護師を対象とした質問が多かった
- Bは誰かが不明(医師なのか看護師なのかなど)な質問が多かった。
- Eは患者を対象とした質問が多かった。

批判的思考を用いてロールモデルを考えるプログラムを実施した結果、思考を刺激する質問の方が事実を確認する質問に比べて多かった。今回、事実確認の質問は視点の切り替え時に認め、視点の切り替えをしていた参加者は、看護師について問いなおすことができていた。一方で視点の切り替えと事実確認の質問が少ない参加者は、思考を深めようとする質問はするが看護師を問いなおすことが少なかった。視点の切り替えとそれに伴う事実確認がロールモデルの形成に關与している可能性が示唆された。

<引用文献>

- 松井英俊, 佐藤敦子(2001): 臨地実習でロールモデルとなる看護婦・看護師から影響を受けた学生の関心. 第31回日本看護学会論文集: 看護教育, 137-139.
- 社団法人日本看護協会中央ナースセンター(2005): 2004年新卒看護職員の早期離職等実態調査報告書
- 多崎恵子, 稲垣美智子, 松井希代子, 村角直子(2007.): 看護師の糖尿病教育におけるロールモデルの存在と実践意欲の実態. 金沢大学つるま保健学会誌, 31(1) 61-69.
- Wiseman, R. F. (1994): Role Model Behaviors in the Clinical Setting. Journal of Nursing Education, 33(9), 405-410

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計1件)

- 鍋田智広、水田真由美、山田和子、松田憲幸、看護学生のロールモデルの実証的調査 - 臨地実習の経験が看護系大学生の

学習目標の内容と達成のための自己調整
に及ぼす影響 -、日本医学看護学教育学
会誌、査読有、Vol24、No1、2015、42-48

〔学会発表〕(計5件)

水田真由美、鍋田智広、山田和子、松田
憲幸、看護学生のロールモデル形成のた
めの学習プログラムの検討、第25回日本
医学看護学教育学会学術学会、2015年3
月14日、島根県立大学出雲キャンパス

水田真由美、鍋田智広、山田和子、松田
憲幸、実習経験が看護系大学生のロール
モデル設定に及ぼす影響：4年生と2年
生との比較、第24回日本医学看護学教育
学会学術学会、2014年3月9日、島根県
立石見高等看護学院

鍋田智広、水田真由美、山田和子、松田
憲幸、看護系大学生のロールモデルに関
する研究 - ロールモデル選択への自己へ
の焦点化の影響 -、第24回日本発達心理
学会、2013年3月15日、明治学院大学
白金キャンパス(東京)

鍋田智広、水田真由美、山田和子、北島
麻衣、松田憲幸、看護系大学生のロール
モデル設定に及ぼす実習経験の影響、第
23回日本医学看護学教育学会学術学会、
2013年3月10日、島根県立中央病院

山本晃輔、鍋田智広、批判的思考に基づ
く自発性を大学教育で育成するための課
題、大学教育改革フォーラム in 東海
2013、2013年3月2日、名古屋大学東山
キャンパス

6. 研究組織

(1) 研究代表者

水田 真由美 (MIZUTA, Mayumi)

和歌山県立医科大学保健看護学部・准教授
研究者番号：00300377

(2) 研究分担者

山田 和子 (YAMADA, Kazuko)

和歌山県立医科大学保健看護学部・教授
研究者番号：10300922

松田 憲幸 (MATSUDA, Noriyuki)

和歌山大学システム工学部・准教授
研究者番号：40294128

鍋田 智広 (NABETA, Tomohiro)

東亜大学人間科学部・講師
研究者番号：70582948